

# 第十一番 東大寺指図堂の御詠歌 (円光調)

(春の御詠歌)

♩=53

松 濤 基 作曲



〔詠頭〕 ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×  
さ — え — ら — — れ — — ぬ — — ひ — — か — —



○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×  
り — — も — — あ — — る — — を — — お — — し — — な — —



○ ⊗ ⊗ ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×  
べ — — て — — へ — — だ — — て — — が — — お — — な — —



○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ ⊗ ⊗ ×  
る — — あ — — さ — — が — — す — — み — — か — — な — —

## 第十一番 大和の国 東大寺指図堂

さへられぬ 光もあるを おしなべて 隔<sup>へだ</sup>て顔<sup>がほ</sup>なる 朝<sup>あさ</sup>霞<sup>がすみ</sup>かな  
(法然上人御作)

治承4年(1180)、平重衡<sup>たいらのしげひら</sup>により東大寺や興福寺など南都の町々が焼き打ちに合い、人々の心の動揺は計り知れないものがありました。後白河法皇<sup>ごしらかわほうおう</sup>は、一刻も早く東大寺を再建したいと願われて、翌年東大寺造営の勸進職<sup>かんじんしよく</sup>を法然上人に内命されたのです。しかし、上人は名利<sup>みょうり</sup>を厭<sup>いと</sup>い専修念仏の身であるとしてこれを辞退され、お弟子の俊乗坊重源上人<sup>しゅんじょうぼうちゅうげん</sup>を推挙されました。指図堂<sup>さしずどう</sup>は、勸進職となった重源上人が再建工事の指図<sup>さしず</sup>をなされた普請場の跡で、法然上人も陰の力となって手助けなされたのです。その後建久2年(1191)の頃、この東大寺で多くの学僧を前に浄土三部経を講説されたのであります。指図堂の御影<sup>みえい</sup>は、墨染の衣に金剛草履<sup>こんごうぞうり</sup>をはいて勸進されている法然上人の珍しいお姿であります。

**大意** 阿弥陀さまのすべての人を隔<sup>へだ</sup>てなく救い取ろうとされるお慈悲の御光は、さえぎろうとしてもさえぎることができません。しかし、朝霞が春の光を一樣に隔てるように、疑い迷う心がお慈悲の光を隔ててしまいます。阿弥陀さまは、たとえ疑い迷う心を持ってもお念仏する人を照らし、救い取ってくださいます。なんとありがたい教えではありませんか。

### ポイント注意

- 「ひかりもー」「へだてがー」の「ー」の音程、半音低くならないように。